

人の加齢とライフコース

山 岸 治 男*

【要 旨】 ライフコースの概念は社会学の所産であるが、ここに心理学や社会福祉学から「加齢」・「発達」・「変調」・「援助」などの概念を補うと、人の生涯にわたる社会福祉の課題が想定される。それらの課題を「生涯発達福祉」と受け止めるなら、社会における生涯発達のための相互支援・援助の可能性が見え隠れする。ここでは、生涯発達支援の課題や方法を検討する基礎作業として、人の加齢とライフコース形成のしくみを考察する。

【キーワード】 加齢 経験 発達 変調 社会福祉

I 本稿の課題

人は一般に心身の快適・快調な状態を欲している。この状態を「福祉」と定義すれば、人の「生」の目標は福祉の実現にあると言うも過言でない。ところで、福祉が相互に他者の福祉と齟齬をきたさず、かつ、実現する福祉の内容が各個人の意欲・判断・決断・努力などによってのみ決まるものであれば、福祉の追究は個人に一任され、社会化される側面は僅少であろう。だが、現実には、歴史の展開に検証される通り、福祉は次第に社会化、つまり、「相互に助け合い協力し合って実現すべきもの」とされ、今日、それは一般に「社会福祉」の概念によって語られるようになっている。

では、福祉の社会化が広汎に認められるようになった背景は何であろうか。人々が社会福祉の必要性を認識して来た歴史を見つめると、先ず次の3点が浮かび上がる。

一つは、家族・血縁や近隣・知友人など、日常的接触の多い間柄に自ずと生まれる人間関係・社会（小集団）関係である。これら、人格的交流密度の高い間柄の場合、心理的に自我包絡が進行し、喜怒哀楽などの共有が発生しやすくなる。その意味で、これは人類の誕生と共に存在した「社会福祉の原点」と言えるかも知れない。

次に、「生」の快調や不調が、環境としての社会におおいに起因することが、資本主義と共に発達した社会科学によって実証されたことである。資本主義の基本原則は「経済活動の自由」にある。それは富の獲得競争と社会格差を生み出す。「敗者」が受ける不調の解決をめざして生まれたのが社会福祉の思想である。資本主義社会における「社会福祉の原点」と言えよう。

第三は、近年、生命の長寿化、生活の個人化が進み、生涯（人生）の質を問う思想が生まれはじめたことである。長寿化は、経済力とは殆ど無関係に高齢期の体調に変調・失調が起こり

平成 20 年 10 月 31 日受理

*やまぎし・はるお 大分大学教育福祉科学部社会教育・教育社会学教室

やすいことを実証した。高齢期の独居生活も人生中枢期の地位に殆ど関係なく発生する。こうした状況下、各個人の快調な生活と主体性尊重を両立するには、改めて公共のしくみとしての社会福祉が問われることになる。成熟社会における「社会福祉の原点」と言えようか。¹⁾

このように見てくると、今日の社会福祉には、資本主義社会の歩みと共に発生した貧困や失業など、社会福祉の古典的課題とともに、介護、孤独、災害(安全)、犯罪(安心)、「生」の充実(QOL)など、長寿化や社会の成熟化に伴う、いわば現代的課題が横たわっていることを自覚しなければならないことに気づく。では、こうした課題に応えるには、さしずめどのような研究が必要になるであろうか。

提案される研究は多様であろう。それに意義が伴うか否かは、当該社会の社会的評価に委ねられる。今はこれまでの研究蓄積において推測できる範囲の提案に留まるが、あえて提案すれば、筆者の場合、それらの一つがライフコース論に立つ「生涯発達福祉」の研究である。ライフコースの概念は社会学の所産である。そこに、加齢、発達、自立、変調、援助など、心理学、教育学、社会福祉学等が使用してきた概念を導入することになる。

社会学は「ライフコース」を「個人における出来事と経験の束」と定義する。²⁾この定義から、人の社会的経験とそのコーホート分析が精密になった。だが、個人の内面、特に、身体・感情・社会性・主体(実存)性など、「人の心身状態」の移行と社会環境との関係について、ライフコース論は十分には触れていないように思われる。社会福祉の現代的課題の一つとして「生涯発達福祉」を提案する主な理由はこの点にある。提案には個人の心身の生涯にわたる快調さを社会的に支援する発想を持たせたいからである。³⁾

本稿は、以上の問題関心に立ち、「生涯発達福祉」研究の基礎作業として、次の点を解明しようとするものである。

- 1)人が生まれ、加齢し、死去する生涯を諸科学の視点から概観する。
- 2)加齢に伴う諸経験を、心身状態の移行・発達・変調などの視点から概観し、分析する。
- 3)前の2)をライフコース論と接合し、ライフコース論に新たな視点の導入を試みる。

これらの試みは「生涯発達福祉」研究の基礎作業である。したがって、ここではまだ、直接社会福祉に言及することはほとんど無いことを予め断っておきたい。

II 人の誕生・加齢・死去

1 人の生涯(一生)の観察

人の生涯(一生)はどのように語られ理解されてきたか。哲学、教育学、社会学、心理学、精神分析学、医学などで語られてきた内容を概観してみよう。

哲学や倫理学において、人の一生は「人生論(どう生きるべきか)」として語られてきたように思われる。日本でよく知られたその代表格は孔子の『論語』に語られた内容であろう。15歳、30歳から70歳以後までの、いわば理想的な精神状態が語られている。

教育学も、人の理想像を設定し、そこに向かう筋道を語ることが多い。学術的に著名なのはハヴィーガーストの「発達課題説」である。彼によれば、青年期には自己の性について十分な理解力を養うという課題がある。発達課題説を活用すれば、生涯学習論をさらに深めることが出来るであろう。

社会学における人の生涯は「ライフコース(人生行路)」研究に集約されよう。個人が辿る出

来事と経験の時間的推移に社会の動向を読みとろうとする研究である。例えば、歴史的な出来事が、それを経験した人々に、どんな影響を与えるか等の研究として結実する。

心理学における人の生涯を観察する基本的視点は「発達」である。幼児期・児童期・高齢期などの時期区分も「発達」という視点から行った区分である。「発達」の解釈は人の価値観に左右される面もあるが、没価値的操作を加えれば科学に馴染む概念になり得よう。

精神分析学は、心理学と共通項を持ちながら、人の無意識の領域を探ることによって我々の思想や行動、芸術やスポーツなどをこころの深層から研究する。人の生涯には当人に自覚された意識と自覚されない無意識との葛藤が刻印されることもあるという理解を可能にする。

自然科学で人の生涯に深い関心を寄せるのは生物学と医学であろう。両者は有機体としてのヒトの肉体の変化に着目して、「小児」・「老人」・「病人」などを区分する。ただし、精神医学は主としてこころの変化に着目する科学である。

2 人の誕生と諸々の「格差」

ヒトも動物種の一つである。では、一般に人の誕生は他の高等動物とどう違うか。人と高等動物に共通なのは、誕生に雌雄2つの性が関与し、雌の胎内で一定程度成長した後誕生することである。他方、両者の特徴的な違いは、人の場合、通常、綿密な社会組織の下に誕生に関わる文化的手続きを経、誕生する当人の知らないところで法的な保護や制約などを受けて生まれることである。

では、高等動物から区別されるこうした特徴は万民にほぼ等しく行き渡っているかというところ一般にそうでないことも多い。生涯の始発点から「格差」が見られるのである。それが、国や民族などの文化の違いによるなら、ひとまずさて置くが、そうでなければ、誕生時からの不平等が認識されることになる。日本に生まれる場合でも、例えば、胎児期に父が死去したり失踪したりする場合、両親の経済力が乏しい場合、両親が周囲の社会とネットワークを持たない場合、周囲が不衛生な環境の場合、医療システムに不備がある場合、……などの不平等がある。

また、経済力や社会的環境とは別途に、誕生時の家族に心理的なストレスがあったり、両親の育児知識や乳児への思いに顕著な過不足があったりする場合もある。さらに、当人自身に、先天性の障害があることもある。「虚弱体質」を遺伝的に持って生まれる場合もある。

一方、どの民族にも、人の誕生を「祝い事」として受容する文化がある。そこには、人の誕生が単に当該誕生者個人やその親の「私事」ではなく、親族や地域の「公事」であるという見方が横たわっている。就職・婚姻・退職・死去などにも、伝統的儀礼を観察するとすべて公事性が潜在することに気づく。つまり、人の「誕生」は個人の生涯の始発点であるのみでなく、個人の「社会参加」の始発点でもあるのである。

ただ、今日、この様相は大きく変化している。例えば、隣家の子の誕生を互いに関知しない状態が広がっている。上級学校に合格したり、卒業して就職したりする場合でも、入学先や就職先はプライバシーとして喋らないことが多い。誕生や入学…の公事性が地域的集団を離れ、役所・官庁への手続き関係に矮小化する傾向がある。他方、赤子の泣き声を巡って当該家族が「攻撃」され、周囲から孤立する母親も現れている。公事性が極端に後退し、その分、私事性が全面に出てきたためといえようか。

3 加齢と通過儀礼

誕生した後、人の生涯はどんな経路を辿るであろうか。枝葉末節にこだわれば、人の生涯は「一寸先は闇」の言葉通り何らの見通しもないことになる。しかし、一般には、「這えば立て、立てば歩め、の親心」というように次の段階を想定した期待が寄せられる。そこで想定される段階は、集団が経験的に感知し共有する、人の生涯に関する見通しである。それらは、1) 身体的発達の段階、2) 文化としての通過儀礼、3) その他想定外の出来事、の3つに集約できる。

人の生涯に関し、外見から最も判断しやすいのが年齢である。わたし達は人の顔つきなどの外観から年齢を推測する。人は、誕生以後、衣食住という暮らしを基礎に身体的に変化する。そこに一定の段階を設定したのが「身体的発達段階」である。私たちは日常的に赤ん坊(乳児)・子ども(幼児や児童)・若者(青年)・大人(成壮年)・年寄り(高齢者)の区分をしている。それは、加齢に従って歩む人の生涯の経路に関する「経験知」である。

他方、社会は、身体的経路の進行(発達)に呼応するように、「社会的地位・役割」を文化として設定する。いわゆる通過儀礼である。一般にそれは性と年齢を基準に設定される。現在の日本なら、小学校入学、子ども会加入、…学校卒業、就職、結婚、職場の昇進…退職、地域役職経験、老人クラブ入会…等として想定されよう。

ところで、こうした人生儀礼について、今日発生している事態は、それらの全容を「個人の選択」に委ねようとする動きである。人生儀礼が個人の選択に委ねられれば、それによって取得する「地位・役割」も法的基盤に拘束されるだけになり、文化的拘束が後退する。そこに顕在化するのが「お役所仕事」・「マニュアル化された役割遂行」である。

さて、想定外の出来事であるが、具体的には、事故、病气、事件、非日常的出来事などを指す。人の生涯には、想定される人生儀礼とは異なるこの種の出来事が伴いやすい。想定外の出来事は、「宝くじに当たる」などのプラス内容もあろうが、「会社の倒産による40歳代なかばの失職」など、マイナスの内容も多い。⁴⁾

人の生涯は、こうして見ると、身体的発達・変化を基盤に、社会的通過儀礼を辿り、その間に幾度も、想定外の出来事に会い、時には紆余曲折が待ち受けるものとして展開することが分かるところである。

4 老いと死去

生涯のターミナルは勿論「死去」であるが、一般に、死去の前段に「老い」がある。老いが伴わない死は若死に(病死・事故死・自殺など)であるから老いて死ぬほうが自然の理にかなっている。では、人の生涯に於いて老いや死はどう理解され、受容されるであろうか。

老いには「老練」など成熟した精神の極みの意味がある一方、「老化」など能力の衰えの意味が伴う。老いは、確かに心身の能力が衰える様を表している。だが、能力の低下の度合いも科学技術など人間の社会的所産との関係が大きい。例えば、福祉や医療技術の未発達な時代と、それらが高度に発達した時代とでは、同じ70歳でも、平均的心身能力には差が生ずる。バランスよく栄養摂取ができ、スポーツを楽しむことができ、学歴も高くして常に思考を忘れない人とそれらが不十分な人とでは、「老い方」にも違いが現れよう。よりよい老い方を求めるところに「生涯スポーツ」や「生涯学習」の意義の一端がある。

死の迎え方にも、社会のありよう、つまり時代の状況が反映される。福祉や医療制度の発達に伴い、「病气と死去との間」は遠退き、ぼやけてくる。病气になったり老いたりすると「突然

やってきた死」が、病み、老いてから「逝き支度のできる死」へと変化する。支度、つまり心の整理がうまくできる人にとって、それはありがたい状況であろう。逆に、それがうまくできない人にとって、それは死の恐怖感をかえって長引かせかねない。長寿化、福祉や医療の高度化は、単純にそれだけでプラスの価値なのではなく、それを受け入れ活用する各人の「人間力」と相俟ってはじめて価値を帯びるものかも知れない。ここにも、「人間力」の構築を目標に行われる、「生涯学習」の意義の一端が見え隠れする。

どうあれ、死はそれまで継続してきた社会参加から身を引くことを意味する。したがってそれは、卒業や退社と同様、「社会的引退（集団からの離脱や役割からの離脱）」の意味を帯びる。他方死そのものが自然死であっても、社会は通夜・葬式などの社会的儀礼を半ば強制する。人類は、「死者とも対話しようとする」文化的存在である。

通常、ライフコースは死をもって終了する。だが、社会には、死者に対して、1周忌、3周忌など、100周忌頃まで、「故人をしのぶ」儀礼がある。著名人の場合は、さらに「生誕200年祭」なども珍しくない。これをライフコースの延長分と見るか否か議論もあろうが、ここでは、死去をもってひとまずライフコースの終わりとしたい。

Ⅲ 加齢に伴う経験と心身状態の移行

1 加齢・経験・心身状態の関係

人の「生」を時間的経過に着目して見れば、加齢と心身状態の間に密接な関係のあることが即座に読みとれよう。私たちは一般に、人の心身状態を見て相手の年齢を推測することが多い。加齢は時間の経過に即して進行するので、一方向的である。これに対して、心身状態は、例えば病気の進行と回復など、短いタイムスパンで見ると、双方向的ないし複方向的とも言える面を見せる。しかし、なお、長期的視点に立てば、身体的には、成長からスランプ状態へ、さらに老いへという一方向的ベクトルがあることも事実である。心的・精神的にも、「先祖帰り」などの一時的現象はあり得るとしても、長期的には「成熟」へと向かうベクトルを想定することができるであろう。

では、加齢とそれに伴う心身状態の変化は、何によって媒介されるか。多くの人々の日常的観察から、さらに、「オオカミに育てられた子ども」などの事例から、そこに「経験」が媒介することは自明の理と考えてよいであろう。とすれば、加齢は、その間に展開する経験を通して心身状態の変化に関わることになる。

2 経験の意味

ところで、経験とは何であろうか。辞書的定義を待つまでもなく、私たちの日常は経験で溢れている。それをあえて問うのは、人の活動のどのレベルまでを経験と言うのかを考えるからである。「食べる」行為は誰もが経験の一つと認めるであろうが、では、胃腸による食物の「栄養摂取」活動はどうであろう。人体の一部が成す活動であるが、通常、こうした内臓の活動を経験とは言わない。神経細胞突起の先端で行われるイオンの放出による情報伝達なども、神経細胞学的実験でこそ確認できるかも知れないが、通常、経験とは言わない。こうしてみると、経験は、人の五感によって広く確かめられる範囲の活動を指す言葉であるに違いない。⁵⁾

経験の語をこの範囲に限定することは、通常、加齢と心身状態の変化を関係づける上であま

り困難を来さない。「いろいろな食品を食べたから健康である」「失業したので精神的に不安定である」などは妥当な命題として受け止められよう。

だが、命題として妥当であることの彼方に、妥当性の詳細な根拠を探る場合はどうであろうか。科学とは、そうした探究を深める活動である。いろいろな食品を摂取すると何故健康が維持できるのか、失業すると何故精神的に不安定になりやすくなるのかを説明するのが科学である。こうした視点を導入すると、経験と心身状態との関係を説明するには、経験した内容について、それが持つ心理的・社会的意味、経験の心理的・社会的仕組みやメカニズムを十分に吟味しなければならないことに気づく。

3 経験と心身状態

では、経験は人の心身状態とどのように関係するであろうか。神経細胞の情報伝達メカニズムなどを含む脳科学レベルまで探らなければ説明できない関係もあるが、多くの場合は社会学、心理学レベルの説明でほぼ足りる。例として、このレベルで、前の「失業」と「精神的不安定」の間を関係づけて見よう。

失業、とりわけ中年・実年期の失業は、先ず本人に自分の将来の経済的基盤を不透明にする。不安の原因の大半はここにあろう。家族として配偶者や学齢期の子ども、老親がいる場合、これら家族を扶養する基盤が失われることを意味する。では、失業に対する社会的支援が殆ど期待できず、失業が長引いた場合、心身状態はどのように変化・展開しようか。

例えばという断りを入れながらも、次のようなシミュレーションが可能であろう。

- 1) 親族会議を開き、当面、親族からの支援を受ける。この件をめぐって親族間に心的葛藤が起きやすくなる。本人や当該家族の、親族に対する立場が弱くなりストレスの大きい生活が続くことが予測される。
- 2) 高校に通う子どもがアルバイトをはじめ、定時制に転校する。卒業後は大学進学を断念し、やむをえず就職するも、進学したい思いが残り続ける。本人、配偶者も時給の高い夜間の非正規雇用の仕事に就く。困らんなども減少し、家族がまとまりにくくなる。
- 3) 失業した子どもの扶養になっている老親が引き籠もりがちになる。自宅から出歩かなくなり、体調を壊す。老親の失調が気にかかり、家族内に緊張感が高まる。……など。

勿論、これらとは逆の、見通しの効く変化・展開も不可能ではないが。

このように見ると、経験は人の生活を、先ず「心身状態」において強く規定する要因になることが分かる。

では、人の生涯には、加齢に伴って、一般にどんな経験が付随するであろうか。加齢には一般に、①身体的意味、②社会的意味、③精神的・実存的意味などがつきまとう。加齢に付随する経験の多くもこれらの意味と共に出現すると考えられる。⁶⁾

加齢は、身体的には、「成長・発展」と「衰退・老化」の意味を伴う。成長・発展の緒に就く子ども時代は、身体的変化の自覚を促され、その度合いによって身体的行動の自立が期待される。自他による期待の度合いとその対応、及び現れた結果とそれに対する自他の評価が、心身状態に影響する。古典的には、フロイトの「口唇期」・「肛門期」・「性器期」などの分類概念もこの点と関わるであろう。筆者は、水泳ができないために夏の体育にストレスを感じ、不登校気味になる高校生の相談に応じた経験がある。一定程度「成長・発展」を遂げ、安定した状態の成・壮年期は一般に心身のフルな活動を伴う労働力として期待される。高齢期には身体的労

働はあまり期待されなくなるが、なお、「老練」の意味において、その叡智が期待される。ただ、これは身体的と言うより、精神的意味ととらえるべき範疇であろう。

社会的経験は、身体的能力と知的・技術的能力を基礎に展開する。それは、他者との交流、関係形成、集団参加、役割取得、規範の受容などが付随する経験を指す。親に連れられて通園するだけの幼稚園3歳児が年長になると、「つぼみ組（年少クラス）さんの手を引いて入場行進するのですよ」と担任から指導され、言われるままに行動しながら、やがて年長組という自覚に達するのである。人が家族や学校、職場やサークルなど、多数他者と共同し、協力しあえるのは加齢と共にこうした社会的経験を累積し、役割や規範について幾度も学習しているからである。逆に、そうした学習が不足であれば、社会的経験はおぼつかないかも知れない。社会的経験と心身状態との関係については、当該時代の当該世界（業界）、当該集団などが一般に期待する社会性が発揮され得るか否かにかかっている。若干の過不足は本人の調整力によって補われようが、その範囲を大きく超えた場合、「集団になじめない」状態が生まれる。⁷⁾

では、加齢に伴って、どんな精神的・実存的経験が発生しようか。精神的・実存的経験は、他の経験と異なり、身体的・社会的行動などの内奥において、本人の評価や解釈、意味づけや意義づけ等として内発するものである。したがってそれは、評価・解釈・意味づけなどの枠組みや能力の発達と相即する。また、例えば、成功だけでなく、失敗や行き違いなどに対する本人の許容力も大いに関係しよう。一般的に記述すれば、精神的・実存的経験の質が心身状態を大きく左右する。

経験は、記したように、心身状態の形成に影響する。筆者は、関東大震災で家と第一子（男）を失い、復興後、今度は東京大空襲で家を失った家族の話を聴いたことがある。この家族はその後生まれた第二子（女）の安全を考え、田舎に疎開し、今日まで田舎で暮らしている。

IV 経験と心身状態の移行；ライフコース

1 経験の諸レベルと心身状態

経験と心身状態をどのように関連させるか、本稿では笠原嘉の発想をヒントに検討したい。心身状態を「生活」の視点から見ながら、笠原は、1)身体的次元、2)心理・社会的次元、3)精神的・実存的次元の3つに区分する。笠原の区分に学びながら、筆者はこれを4つに区分し、そこに、経験を符合させてみたいと思う。⁸⁾

まず、人の心身状態については、「身体」と「こころ」を連続的に把握する。「こころ」の基盤を「身体」に置き、発生した「こころ」は「身体」にも影響すると考えることとする。その上で笠原に倣い、図一1のように心身状態を4つに区分し、各区分に経験を重ねよう。

①「身体的状態」は、こころを生み出し発達させる基盤である。②「情動・感情・情緒的状态」は、その充足と安定が求められ、満たされれば他者信頼感を形成する。③「社会的状態」は、他者信頼感を基礎に対人的・対社会的に関与しながら、本人の外に広がる社会的文化的環境から要請された役割や規範の取得として現れる。最後に④「精神的・実存的状态」は、環境からの要請を意識しながらも、本人自身の内面に形成した主体的・実存的価値判断を表示する部分である。知識・技術は発達段階に即して形成されるので、別途※印で示した。

では、経験はこうした心身の発達状態とどう関わっているようか。第一は無意識的な経験である。乳幼児期の「いつの間にかしていた経験」などである。この経験で重要なのは、感情など

の「執着」傾向の有無である。第二は慣例化された人生儀礼にほぼ従う経験である。所属社会や集団が用意した人生の計画表をほぼ踏襲する場合である。これは「生活誌」的な「生活史」を紡ぎ出す。第三は主体的・実存的に「我が道」を行く経験である。時には、第二の経験とすれ違い、他者や社会・文化・組織などとの間に葛藤も生ずる。

ところで、無意識的に行う経験は、「身体的状態」や「情動・感情・情緒的状态」に強く影響する。具体的内容はフロイトやユングによる解説に委ねたい。また、人生儀礼にほぼ従う経験は、一般に多数の人々に共通する経験であり、人の「社会的状態」を大きく方向付ける。人々の協力やトラブルなどの大半はこの経験において発生する。さらに、我が道を行く経験は、それを阻害する他者や「人生儀礼にほぼ従う経験」などが持ち合わせる諸条件との格闘・協調・調節などを伴い、人の「精神的・実存的状态」と深く結びつく。

このように見ると、人の経験と心身状態とが密接に関わっていること、即ち、心身状態（心身の発達）が一定水準に到達しなければ、その水準に到達して初めて可能な経験ができないことがあるのに気づく。例えば、今日、発達障害者による非行や犯罪が問われているが、発達障害者に同年齢の一般の人たちに要請される③の状態を求めるのが困難であることを社会は冷静に認識しなくてはならないであろう。同時に、この人達と社会的共生を目指すには、障害を緩和する学習プログラムを開発し、適切な教育を実施する必要がある。

図—1 心身の諸状態

④精神的・実存的状态(意思や信念の表示, 価値葛藤, 苦悩…)	※知的 技術 的状 態…
③社会的状態(対人関係, 役割遂行, 規範遵守, 責任, 生活慣行…)	
②情動・感情・情緒的状态(痛・熱・冷・固・温の感覚や喜怒哀楽…)	
①身体的状態(内臓, 感覚器官による外界受容, 脳神経系による伝達…)	

2 心身状態の実態

では、経験と密接に関わる心身状態は、経験によってどんな実態を示すであろうか。人は一般に、日常の生活経験、即ち、食事、仕事、休養、祭りや儀礼などを通して、身体的・情緒的発達や、社会的・精神的発達を遂げ、年齢相応に心身の成長した状態を形成する。幼児の時は、見知らぬ通行人に道を尋ねられ、怖くなって家の中に逃げ込んだ人でも、長じて地域の観光案内の達人にもなるのである。通常どこにでも繰り広げられるような経験が、人の通常的心身状態を形成すると言えるであろう。

だが、経験には、こうした通常から見ると「逸脱」と見えるような経験もある。例えば、長患い、虐待、いじめ、勤務先倒産、復職直後のIT機器化による職務執行上の混乱など、枚挙にいとま無いほど多くの経験が脳裏に浮かぶであろう。これらの経験は、身体や感情、社会的行動や精神的判断などに様々に影響する。先に記した筆者の知人の例がそれを物語るであろう。若いときに東京に出、経済的「成功」の少し手前で大震災と戦災に出会ったのである。東京で「成功」する目標を断念した事例といえる。

3 歴史的経験と心身状態

筆者の知人の例を待つまでもなく、通常とは言えない経験（非日常的経験）の一つは当該個

人が生きる社会の状態、つまり歴史的状況を背景にしている。例えば、1980年代の若者の場合、大学卒業者の多くは当該学歴に相応しい職を求めることができた。だが、1990年以降非正規雇用化が進む中、それは次第に困難になっている。そこには経済のグローバル化、新自由主義経済思想の導入など、経済・雇用政策を巡る歴史的状況の変化が横たわる。⁹⁾

歴史的経験は、個別に様々な条件をもつ諸個人に、様々な個別の心身状態を形成する。例えば前に1990年前後以降の日本の経済状況に触れたが、この状況下、全ての若者が就職難に遭遇したわけではない。一部「有能」者は企業幹部候補生として、それ以前の若者より優遇されたであろう。また、一部には、「時来たり！」と若くして起業する者もあった。ここには、2つの規定要因が作用する。一つは、文字通り歴史的状況が直接的に諸個人に影響する側面である。もう一つは、諸個人がそうした状況をどのように受け止めて対応するかという側面である。後者には個人の主体的実存的経験が符合するが、ただ、それには当該個人自身の「自己能力評価」などが関わっていることも容易に見て取れるであろう。

こうして、個人は、時に「歴史に翻弄される自己」を感知して心身を患ったり、「歴史を泳ぎ切った自己」を感知して自信をつけたり、様々な心身状態を形成する。日本の近・現代だけに限っても、明治維新以後の近代化政策があり、産業構造の変動があった。移民政策や植民地・外地などへの農民移住政策もあった。第二次世界大戦の終結に伴う移民や移住者の経験には、大小様々な「歴史に翻弄された」部分が読みとれる。¹⁰⁾

4 対人的・対集団的経験と心身状態

心身状態は、微視的に見れば、対個人や集団との関係においても微妙に変化する。思春期に多発する交友関係の変化とそれに伴ういじめや不登校などに典型例を見出すことができよう。同時に、例えば、「葉害肝炎感染者の公的救済」を求めて行動する人や、「限界集落を崩壊させるな」と地域社会に積極的に働きかけ、社会的行動を継続し、一定の社会的効果を生み出そうとする人もいる。そこには、自己役割や責任感、使命感などが少なからず横たわっているであろう。また、そうした想いを内発させる正義感なども潜在するであろう。

例示したのは、葉害肝炎に悩んだ経験や悩む人との交流経験、限界集落に生活する経験等であるが、社会的救済や社会制度の改変を求める活動などを通して、当人の社会的・精神的心身状態がさらに変化することも予測される。歴史に登場する人物のうち、評価の高い実践家の多くは、いろいろな意味において、こうした心身状態を社会という生活環境に投げかけた人たちである。この意味で、社会は「一定・固定・不動」を保守しようとする側面を持ちながらも、そこに常時人々の「思い」が競合したり調整し合ったりしながら投げ込まれ、「流動・変動」する側面も持つと言える。

5 心身状態の認識と主体性

さて、諸経験と関わりながら、人は一般に成人に近づくにつれ、自己の心身状態を次第に客観的に見つめることができるようになる。勿論、自己観察力にも個人差はあるが、幼少期と成人以降では同一人物内において大きな違いのあることはおおかたの了解が得られるであろう。人はこうして、「身の丈の」・「実力相応の」自分にできる行動を自分の意志・責任の範囲で行うようになる。いわゆる主体性の課題が登場するのである。はじめは、自分の「年齢と性」の同じ他者一般と自分を比較し、他者一般の水準に近づけようとする。人並みを求める心理状態は

社会化の重要な契機である。やがて、葛藤や思索を通して「自分は自分」の自覚に達し、他者一般とは異なる意志・信念・価値判断を成していく。

人はこうして、日常的に多くの人々が採る態度や行動の具体化を自分の意志で行う。受験校の選択、卒業後の就職先や職業選択、恋愛し、仲間として交流し合う友人などの選択、配偶者の選択、出産児数の選択、はては、住まいや調度品のメーカー選択まで、通常の生活に発生する選択的場面に、ごく普通に対応するのである。

他方、歴史的出来事や人生上の特異な出来事にも、主体的に対応することが迫られる。前に例示した関東大震災被害や東京大空襲被災などは、一種の歴史的出来事である。他に、政治的経済的動向や法制度の改変などがあげられる。これら歴史的環境の変化においては、一般に、当該変化に追従する以外に選択肢は見出しにくい。そうした条件において、尚、それらに追従するだけでなく、様々な形で自分の意志、即ち主体的・実存的選択を試みる場合がある。与謝野晶子が詩に託した非戦の意志、ナチスに関与しながらもユダヤ人の救済に奔走したシンドラールなど、例示すればこれもまた枚挙にいとまがない。こうした経験は、当該個人のさらなる主体性の確立に影響するであろう。

6 心身状態の移行とライフコース

人は、こうして経験を重ね、経るたびに心身状態が変化・移行する。心理学ではこの移行を「発達」という概念をもって把握する。また、精神分析学では「こころの軌跡」として扱うことが多い。

ところで、では、社会学はこれをどう扱うであろうか。社会学の場合、初めから人の生活経験全体を観察するので、心身の移行のみを課題にすることは少ない。しかし、逆に、心理学や精神分析学が関わる人の心身状態に関与するのでなければ、経験を検討する上で大きな成果は期待できない。なぜなら、人は通常、感情も意志も持つ生き物であり、単に法制や慣習や流行に従った外見的行为を採るだけではないからである。

こうして、心身状態の移行を時間的推移に即して検討しようとする、ライフコースに、単に出来事への対応の束という定義に加えて、「心身状態の時間的推移」を付加する必要があることに気づく。人や歴史社会の諸制度や慣行などと関わり、感情を安定したり傷つけたり、意欲を増大したり失望したり、そこに様々な心身状態を形成したり修正したりする心身状態の移行過程があるのである。ライフコースには、社会的経験に伴う心身状態の変化が発生し、そこに内面のいわば軌跡が編み出されていく側面が伴うのである。

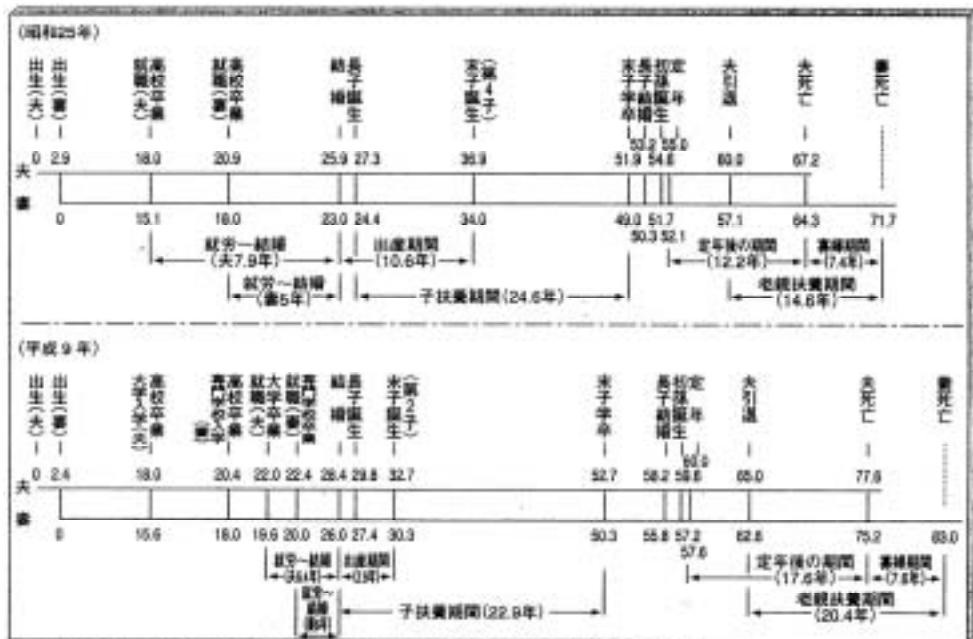
7 長寿化・ライフスタイルなどの変容とライフコース

ライフコースは、さらに、長寿化やライフスタイルなどの変容によってもその様相を変える。厳密に言えば、これはライフサイクル論において行われた議論であるが、例えば図一2のように、1950年に比べ、1997では10年以上の長寿化が見られる。この間のライフスタイルも大きく変化した。たとえば、一般に変化した事柄として、就労年齢の上昇、結婚年齢の上昇、出産児数の減少、育児に関わる年数の縮小、子の高学歴化に伴う「扶養」年数の長期化、退職後の「自由時間」の増大などが議論されてきた。これらは、ライフコースを構成する要因としても関わってくる。

8 ライフコースにおける実存的側面；作られる人生と創り出す人生

ライフコースは、このように見ると、作られる側面と創り出す側面の二側面を持つことが分かる。誕生以後の展開において、身体の変化・移行は、基本的には「人体」が生きているという自然の営みによって推移するものであろう。そこに、情感や社会性や実存などを認識する状態が生まれるのであるが、それらの誕生・展開には外部環境と身体との間に繰り広げられる相互作用としての経験と、内面における経験の受け止め枠の2つが関与する。環境からの要請に対応する意味において、相互作用とその受け止め方は、互いに深く影響し合うであろう。筆者の学生時代の師の一人は、戦地で対戦国と応戦中、上官による「打て」の命令には従ったが、対戦

図一 日本人のライフサイクルの変化



資料：総務庁「国勢調査」、厚生省「産力調査」「人口動態統計」「生命表」などにより作成
 本稿では、高等学校福祉科用教科書『社会福祉基礎』大橋謙策監修 中央法規 2003による

国兵士の体を避けて引き金を引いたという。この行為は、避け得ない社会的状況下に、環境によって「作られる自己」を形成しつつも、なおぎりぎりの所で「創り出せる自己」を己の主体的判断に従って形成したことを示す典型例であろう。勿論、多くの人々のライフコースの大半がこのとおりであるとは言えない。むしろ、環境によって「作られる自己」を無自覚的に形成しているのが大半かもしれない。しかし、人は又、多くの場合、何らかの形で主体的・実存的対応を試みる生きものでもある。

V 加齢・経験・ライフコース～結びにかえて～

1 加齢の社会的・人間的意味

以上、人の誕生以後の加齢を、心身状態の移行の視点から観察した。このように見ると、加

齢は、単に年齢を重ねて年齢相応の心身状態になると言うだけでなく、そこに、社会的・人間的意味が伴うことに気づくところである。

人は一般に大小さまざまな社会に所属して生活するが、所属社会は年齢相応に心身の発達状況と社会的役割を各個人に要請する。この要請は、確かに社会からの「拘束」の性質を帯びる。が、同時に人は、そうした「拘束」を含む役割遂行過程を実体験してはじめて自分の人生に「賭ける」価値を帯びた行動目的や行動目標に出会うのである。「拘束」のない「自由」は「空論」としては成立しようが現実的ではない。「拘束」の彼方に実現しようと意欲する内面の活動は、「拘束」からやがて「自発」ないし「意志」を生み出す源泉になろう。

加齢はこうして、生き続けた時間を示すのみでなく、時間の経過に伴う社会的立場（地位・役割）を形成し、社会的経験を通して己の人生の意義や価値の所在を思索させる原動力になるのである。

2 加齢に伴う経験

加齢に伴う経験は、①幼少時の無意識的経験、②人生(通過)儀礼的経験、③自発的・実存的経験などとして把握することができる。

①が人の深層心理に多大な影響を与えることは精神分析学が教えるところである。無意識的に採っている態度や習慣、感情傾向などがこれに大きく影響されているとされる。

②は、通常、大部分の人が、詳細部分の違いを越えて行う経験である。地域社会の年序集団に加わり、学校に行き、職に就き、職階を少しずつ上り、結婚し…など。詳細部分の違いが当該個人のライフコースを特徴づける。

③は、哲学的に思索すれば当該個人の最も中枢にある「本人自身」を表現するところであろう。②を平均的に過ごしながらも、③において強調するポイントこそがその人のライフコースの特徴であり、その人の人生でもある。¹¹⁾

3 経験の社会的・人間的意味

では、経験は社会的に、又、人間的にはどんな意味を持つであろうか。経験は、前にも記したように環境（自然・社会・他者）との相互作用のうち、本人側に感知され結果した分といえるが、それは、環境への働きかけ（アクション）でもある。その働きかけが多数他者の支持を受けたり、逆に反発されたり、アクションは環境から相応のリアクションを受け取る。そのようにして、社会には何らかの「波風」が立ち、場合によっては社会変動さえも起こる。人は社会的に拘束され影響を受けるが、逆に、社会を「拘束」し、社会に影響することもできる存在なのである。

当該個人は、こうしたリアクションの直接的受け手になる。支持や人気などの評価は歓喜溢れる情感を伴うであろうが、不評、不信、反発などの場合は当該個人の精神的苦難を伴うことにもなる。人はこうした経験を累積するが、早期に苦渋をなめるような経験をする場合と、早期に歓喜溢れる経験に出会う場合とがある。

4 経験の累積に伴う心身状態の変容と移行

経験の累積は、見たように心身状態の変容を引き起こす要因になる。この場合、特に注意を要するのは、これまでの論述から見て、①感情や情緒の動向に影響する幼少年期の経験、②社

会性の発達に影響する児童期の経験，③主体性や実存の発達に影響する青年期の経験である。成人以降の心身状態の多くは，これらの時期に構築した心身状況を基盤に，それらのさらなる意味解釈などを経て構築されると言えよう。どんな視点から，どの水準まで意味を把握できるか，意味解釈の幅に関わるのが生涯学習の効果である。

その意味で，意味解釈の幅の広げ方に影響する教育・学習の重要性をあらためて認識しなければならないところである。

5 移行過程としてのライフコース

心身状態は，次の経験の受容態度や意味解釈に影響する。幼くして保護者から虐待された場合，他者との信頼関係構築に困難が生ずることは近時の臨床心理学の定説である。また，社会的評価の高い社会的実践を成した歴史的人物などの場合は，逆に，不条理で逆説的側面を経験しながらも，なお，それらを共に受容し，共感し，建設的解釈に導く人的環境との出会いが伴っていることが多いことも確かである。例えば，火傷による手の障害という逆接的经验を持つ野口清作（英世）の場合である。実母シカ・小学校6年時担当教師・外科手術を執刀した小林医師などが思い起こされよう。人とのこうした出会いも又，経験の一つである。ともあれ，加齢に伴う心身状態と経験との交叉の連続が，そこに，当該個人が辿ったライフコースの実像を描き出すのである。

註

- 1) この認識は，高島通敏氏の見解を参照したものである。
- 2) 岩波講座社会学，クローセン『ライフコースの社会学』1996，岩波書店，参照。
- 3) この点は，発達心理学のほうが先端的研究に着手しているように思われる。
- 4) 2008年に発覚した大分県教員採用汚職事件を例示すれば，自らは何ら不正をしていないにもかかわらず採用を取り消された21人の教員は，文字通り想定外の事件に巻き込まれたといえる。日本の法体系は，こうした不条理に対して，今日なお極めて不備である。
- 5) ナンシー・C・アンドリアセン，武田雅俊・岡崎祐士監訳『脳から心の地図を読む』，2004，新曜社，参照。
- 6) 笠原嘉「I 概説」(岩波講座『精神の科学1 精神の科学とは』)1983，岩波書店，PP7-10，PP77-78，参照。
- 7) 今日，この意味において社会集団になじめない人々の増大が「社会的引きこもり」として問われている。
- 8) 笠原嘉，前活書参照。
- 9) 山田昌弘『希望格差社会』2007，筑摩書房，参照。
- 10) 拙稿『近代日本人のライフコースと自我形成』，1993，多賀出版，参照。
- 11) 社会学は，この意味で，人々の「平均的な社会的性格」を探究するのみでなく，精神的・実存的性質を帯びた「人生」にも研究領域を広げる必要があるように思う。

On Aging and the Course of Life

YAMAGISHI, Haruo

Abstract

The “course of life” is a concept in the field of sociology. If we compensate this concept with “aging”, “irregularity” And “support”, each of which being a concept used in psychology or social welfare science , then we are to find all sorts of problems crop up in the course of life viewed from the field of social welfare science.

Here in this paper we would like to call the special field coping with the abovementioned problems “life-long developmental welfare”.

The purpose of this paper is to study what aging is all about and the mechanism that controls the making of the course of life and thereby lay the foundation for having a know-how when supporting life-long welfare.

【Key words】 Aging, Experience, Development, Modulation,
Social Well-being